

# 水俣病関西訴訟 道のりを後世へ

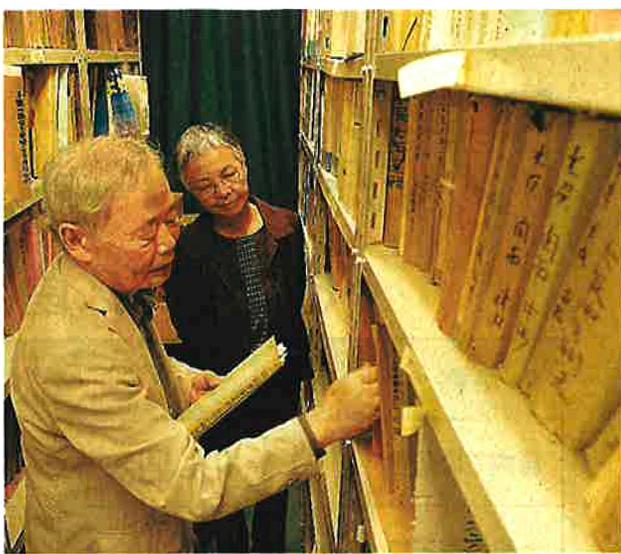
九州南部から関西に移り住んだ水俣病未認定患者らが22年にわたって闘った水俣病関西訴訟。2004年の勝訴確定後、大阪電気通信大（寝屋川市）に残されていた膨大な資料が熊本大文書館で永続的に保管されることになった。15日、調印式があった。

## 大阪電気通信大の資料 熊本大へ寄贈

水俣病関西訴訟は、九州の不知火海沿岸から高度成長期に大阪などに移り住んだ人たちが、水俣病を発生させ、被害を拡大させた責任を問うとして、国と熊本県、チツソを相手に1982年に初提訴した。

原告団は村山富市政権による95年の「政治決着」も拒んで闘い続けた。最高裁は2004年、国と県の責任を認め、従来の基準より広い範囲で賠償を命じた。09年に水俣病被害者救済法が制定されるきっかけになった。

一連の訴訟資料は、2トトラック3台分に達した。裁判を支えた「チツソ水俣病関西訴訟を支える会」代表の横田憲一さんの母校だった。ただ、小田さんは14年に定年退職した。裁判資料から大著「水俣病の病態に迫る」（随想舎）をまとめた横田さんも17年に69歳で急逝した。今後の保管場所の確保が課題になっていた。



熊本大文書館に寄贈する水俣病関西訴訟の資料を整理する小田康徳さん（手前）  
＝いずれも寝屋川市の大阪電気通信大



水俣病関西訴訟の資料を熊本大で保管する覚書の調印式に参列した関係者ら。オンライン会議システムを介して開かれた。

小田さんは「公書史に画期的な影響を与えた裁判の

資料であり、今後も公書研究に役立てられることを期待します」と要望した。山田秀・熊本大文書館長は「あいまいな決着の軍門にくだることを潔しとせずに関わった成果である資料には、新しい次元を開く人間の努力が集約されている」と応じ、資料の散逸を防ぎつつ、調査研究に役立つ

てることを約束した。患者の支援を40年以上続け、「支える会」の代表を引き継いだ庄野久子さん（70）も式に立ち会った。「資料には、生活苦や病に耐えながら国などの責任を問いつけた患者や家族の思いが詰まっている。孫、ひ孫の代まで役立ててほしい」と話した。（武田肇）